

交通をテーマとした小学生のモラルジレンマ授業

筑波大学大学院 正会員 ○谷口 綾子

1. はじめに：モラルジレンマとは？

社会問題の多くは、社会的ジレンマの構造を持つ。社会的ジレンマとは、個々人が、短期的・利己的にはメリットが大きい長期・社会的にはデメリットが大きい行動(非協力行動)か、短期的・利己的にはデメリットが大きい長期・社会的にはメリットが大きい行動(協力行動)のいずれかを選択しなければならない社会状況を言う¹⁾。社会的ジレンマは、文字通り個々人が「ジレンマ」、つまり内的な葛藤を感じる状況であり、人口問題、違法駐車問題、地域の清掃の問題、そして地球環境問題等に共通している。

さて、例えば電車車両内の迷惑行為に対して「それは、結局はモラルの問題だ」などというコメントを聞いたことはないだろうか。モラルとは日本語では道徳と訳され、社会的ジレンマ解消のための根本的解決策の一つとして挙げられている¹⁾。モラルとは、社会的規範に従って行動しようとする自動的な性向であり、このような性向の高い人は、社会的ジレンマ状況に直面した際に「協力行動」を選択する傾向が強い。このため、モラリストの多い社会では、社会的ジレンマ状況が起こりにくいのである。

我が国の義務教育においても「道徳」の単元は存在するが、そこでどのような授業を行うかは、地域や担当教員によって著しく異なっている。道徳の単元は道徳性を高めるために存在するのであるが、「道徳性を高めるとは如何なることか」という点については、これまで教育心理学、道徳性心理学等の分野で議論されてきた²⁾。なかでも、コールバーグの道徳性発達理論に基づくモラルジレンマ授業は、様々な授業実践が積み重ねられてきている³⁾。この実践では、「モラルジレンマ」状況にどのような理由付けで対処するかで道徳性を判断し、その発達には道徳的により高次の意見に触れることで起こる「ジレンマ(葛藤)」が不可欠であるとされている。

社会的ジレンマ状況の緩和に向けて法的・経済的・物理的な様々な対策が講じられているが、人々の自発的な行動変容を促す長期的、かつ抜本的対策として、モラル向上を意図した「教育」の重要性は様々なところで指摘されている。本稿では、交通をテーマとした小学生への授業支援として、秦野市とひたちなか市で実施された授業内容を、モラルジレンマという観点で、子ども達の葛藤場面を中心に紹介する。

2. 秦野市 TDM 授業実践におけるモラルジレンマ

秦野市における授業は、小学校5年生を対象として実施された。まず、自動車利用と地球環境保全が両立し難いことを説明した上で、授業開始時点における各児童のが「自動車を使い続ける」のか、それとも「環境のために自動車利用をやめる」のかを、一人ずつ児童に考えさせる。そして、黒板に各自の考えを(児童一人一人の名前が書かれたマグネットを使いつつ)表明してもらう。次に、自動車のコスト、環境負荷、交通事故リスクの観点から自動車のデメリットを指摘し、身近な秦野市の交通の現状を示すことで「かしこいクルマの使い方」に向けた態度変容のための動機付けを試みた。以上が45分の授業で、休憩をはさみ後半の授業では、実際にかしこいクルマの使い方を考えてもらうため、仮想的な「秦野市内の自動車利用トリップ」を公共交通や徒歩・自転車に変更する「行動プラン」の策定を課題として作業するよう指示した。そして、各グループで話し合いながら公共交通や自転車を使った行動プランを策定するための時間を設け、授業を終了した。

この授業でもっとも重要なポイントは、「自動車利用」と「環境保全」の狭間で児童に葛藤を感じさせ、自分の意見(判断)を表明させる部分である。コールバーグの道徳性活性化理論によると、道徳性とは、いかに広域的な社会的な立場、あるいは遠い将来のことに配慮して物事を捉え、判断することができるか、すなわち道徳的判断の「結果」ではなく、そう結論づけた「理由」によって判別されるものであるとされている。秦野市の授業では、

キーワード 学校教育, 交通・環境教育, モビリティ・マネジメント

連絡先 〒305-8573 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学大学院システム情報工学研

この理論的枠組みを念頭に、自動車利用と環境保全のどちらを優先すべきかという価値葛藤(モラル・ジレンマ)を提示し、それへの価値判断を行うことで、子どもたちの道徳レベルの向上、すなわち態度変容を図りたいと考えたのであった。このため、児童が挙げたいくつかの自動車のメリットとデメリットを、それぞれ「車の利便性」と「排気ガスによる地球環境問題」にしばった上で、環境に多少悪くても車は便利だから減らさなくても良いという「車派」と、環境に悪いので車は減らすべきという「環境保全派」のどちらを選択するかを考えさせる時間を設けた。「環境は守るべき!」と正義を振りかざすことは簡単であるが、それを実行するには便利で快適、かっこいい「自動車利用」を減らさなければならない。これは、児童にとって、どちらも捨てがたい切実な葛藤と言えよう。そして、重要なのは、「車派」と「環境派」のどちらかが正解、という単純な結論を出さないことである。道徳性の発達とは、先に述べたように、「車派」を選んだこと自体でなく、その選択理由の社会性から判断されるべきものであるからである。この授業では、実施したいくつかの小学校全てにおいて、自動車抑制と環境問題に関する意識が授業の前後で活性化したことが事後調査から明らかにされている。

3. ひたちなか市交通すごろくの授業実践におけるモラルジレンマ

この事例は、大阪大学松村暢彦准教授の資料提供を受けて、ひたちなか市立那珂湊第二小学校の6年生2クラスを対象に、自動車利用と交通渋滞、そして公共交通の衰退が高齢化社会にもたらす社会問題の構造を、「すごろく」のゲームを通して学習したものである。

「すごろく」では、児童一人一人が手持ちの交通手段カードのうち一枚を同時に「場」に提示する。交通手段カードは「クルマ」と「電車」の二種類があり、早くゴールに着けると思われる方を選んで提示する。早くゴールに着いた人が勝ちであるが、通常のすごろくと異なるのは、進めるコマ数が、「クルマ」を選んだ人数によって変わる、という点である。これは、「道路における混雑現象をゲームの中で表現しようとしているためである」。

ひたちなか市の事例では、通常版(電車3コマ：自動車は表1参照)、公共交通不便地域版(電車2コマ)、高齢化社会版(電車しか使えない高齢者二人を設定)の三種の異なる設定ですごろくを行った。公共交通不便地域版のゲームでは、電車が通常版よりも一層「遅い」ために、通常版よりもクルマを選択する児童が増加することとなる。その結果、通常版よりもゴールするまでにかかる時間(=カードを提示する回数)が1.5倍から2倍程度に増加してしまう。これは、クルマを選択する人数が増えた結果「混雑」が激しくなり、クルマカードを出す児童が進めるコマ数が減ってしまうからである。さらに最後の高齢化社会版では、高齢者役以外の児童がクルマを選択する傾向が強くなるため、高齢者役となった二名の児童は、ほとんどの場合、他的高齢者でない児童よりも遅くゴールすることになってしまうのである。すごろく終了後には、全ての児童に感想を聞くとともに、高齢化と交通の問題とが関連しているのだという点を他の児童にも体感的に理解してもらうため、高齢者役となった児童にこの理不尽を発表してもらい、授業を終了した。この授業の定量的効果の分析はされていないが、教員からは興味深い授業材料であるとの評価をいただいている。

表1 すごろくで進めるコマ数(通常版)

出したカード	「自動車」カードを出した人数					
	1人	2人	3人	4人	5人	6,7,8人
自動車	6	5	4	3	2	1
電車	3	3	3	3	3	3

4. 終わりに

本稿では、コールバーグの道徳性発達理論を理論的背景として、交通問題をテーマに、児童に「葛藤」を感じさせる授業実践の意義と事例を紹介した。本稿で紹介した事例は、個人的なジレンマを扱うことの多い、いわゆる「モラルジレンマ授業」の形式とは異なっている。社会的ジレンマにおいても、モラルジレンマ授業と同様の授業を構築可能であるのか、また授業効果の評価をどのようにすべきか等、が今後の課題となると考えられる。

参考文献・資料

- 1) 藤井聡：社会的ジレンマの処方箋：都市・交通・環境問題の心理学，ナカニシヤ出版，2003。
- 2) 日本道徳性心理学研究会：道徳性心理学—道徳教育のための心理学，北大路書房，1992。
- 3) 荒木 紀幸：道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践，北大路書房，1988。